韓愈の詩—攻撃性の変容をめぐって

松本　肇

韓愈（字は退之、七六八—八二四）は白居易（字は楽天、七七二—八四六）と並んで、中唐の文壇のリーダーとして君臨した人物である。彼は多くの門弟を擁して文学集団を形成し、エネルギッシュな活動を展開した。それだけに風当たりも又強く、例えば門弟の一人、感性の異端詩人李賀（字は長吉、七九一—八一七）は父親の諱を理由に科挙の受験を妨害された（元和五年）。李賀の受験を妨害した者の攻撃の矢は、韓愈をターゲットとして放たれたに違いない。韓愈は「諱弁」を書いて反攻に出たが、その効果もなく李賀は受験を断念し、このときの体験は「二十にして心已に朽ちたり」（「贈陳商」）という深い傷痕となって青年の胸に刻み込まれた。人は複雑な人間関係の中でしか生きられない以上、敵を倒さなければ自分が倒されるばかりである。生きることは戦いだなどと言えば気障になるが、人間における攻撃性の問題がクローズアップされるのは、正にこのようなところからである。そして、人が現実に対していかに倫理的に関わったかによって、文学の価値が試されるものである限り、攻撃性は文学の根幹の一つとさえ言ってよいだろう。本稿は韓愈に見る攻撃性が、二度の左遷（陽山令・潮州刺史）を契機に変容してゆく過程を、寓言詩[1]を対象に考察するものである。

一　青春の夢

〈怪物〉

貞元八年（七九二）、二十五歳で進士科に合格した翌年、韓愈は初めて博学宏詞科を受験した。その年に書かれた「応科目時与人書」という手紙文の書き出しは、二十六歳の青年のりりしい魂の律動をよく伝えている。

天池の浜、大江の濆に、怪物有りと曰う。蓋し常鱗凡介の品彙匹儔に非ず。其の水を得るときは、風雨を変化して天に上下すること難からず。

ここで彼は、自己を非凡な「怪物」になぞらえているのだが、有力者に対する自己宣伝という現実的効果を計算したこの手紙文が効力を発揮しなかったのは(この年、博学宏詞科受験は落第に終わる)、自己宣伝という枠を突き破って過剰に脈動する青春の矜恃の故だと言えないだろうか。

〈栄光の鳥〉

貞元九年(七九三)に博学宏詞科を受験して落第した韓愈は、貞元十年(七九四)、十一年(七九五)の受験にも落第した。貞元十一年、当時の宰相(趙憬、賈耽、盧邁)に対して三度(正月、二月、三月)にわたり自己の所信を表明した「上宰相書」「後十九日復上書」「後廿九日復上書」も、無視された。「時に遇わず」という深い溜息を洩らしながら都を離れてゆく一匹の負け犬は、潼関を越えて黄河の岸辺で休息していたとき、天子に献上するための白いからすと白い九官鳥を籠に入れて都に向かう行列と遭遇する。このときの光景は敗北感に打ちひしがれた二十八歳の青年の心に強い衝撃を与えた。「感二鳥賦」の序文で彼は書く。

今是の鳥や、惟だ羽毛の異なるを以てするのみ。道徳智謀有りて、顧問を承け、教化を賛くる者に非ず。乃ち反って採擢薦進を蒙るを得て、光耀すること此の如し。故に賦を為りて以て自ら悼み、且つ夫の時に遭う者は、小善と雖も必ず達し、時に遭わざる者は、累善も容るる所無きを明らかにす。

羽の色が変わっている(小善)だけで二羽の鳥が天子に献上される不条理な現実を批判したとき、韓愈を支えていたのは、自己を「累善」と眺める強固な自負心に他ならない。

蓋上天之生余　亦有期於下地
蓋し上天の余を生ずる　亦下地に期すること有るならん

天が私を生み出したのは、この世で活躍するのを期待したからだ。ここに表白された現実参加の志は、韓愈の敗北感が「累善」という自負を媒介にして、上昇志向へと逆転してゆく構造を物語っている。

籠の中の二羽の鳥を目撃して韓愈は激しい批判の言葉を投げつけたが、批判の裏側には自分も籠の中の鳥のよ

うなエリートに転身したいと願う強い憧憬が貼り付いている。籠の中――それは韓愈にとって自由の抑圧された空間を象徴するものではなく、天子の恩寵に満たされた栄光の空間の象徴なのだ。韓愈が「譬えば籠中の鳥の、給を仰いで性命を活かすが如し」（「東都遇春」）と詠じるのは、元和五年（八一〇）、四十三歳のときであり、「籠の鳥」をそのように自嘲的に眺めるには、二十八歳の青春の夢は余りにも無垢であり過ぎたと言えるだろう。

〈理想主義の行方〉

海有呑舟鯨　海に呑舟の鯨有り
鄧有垂天鵬　鄧（林）に垂天の鵬有り
苟非鱗羽大　苟も鱗羽の大なるに非ざれば
蕩薄不可能　蕩薄　能くすべからず
我鱗不盈寸　我が鱗　寸に盈たず
我羽不盈尺　我が羽　尺に盈たず
一木有余陰　一木　余陰有り
一泉有余沢　一泉　余沢有り
我将辞海水　我将に海水を辞して
濯鱗清泠池　鱗を清泠の池に濯わんとす
我将辞鄧林　我将に鄧林を辞して
刷羽蒙籠枝　羽を蒙籠の枝に刷わんとす
海水非愛広　海水　広きを愛しむに非ず
鄧林非愛枝　鄧林　枝を愛しむに非ず
風波亦常事　風波　亦常事
鱗羽自不宜　鱗羽　自ら宜しからず
我鱗日已大　我が鱗　日に已に大なり

我羽日已修　　我が羽　日に已に修し
風波無所苦　　風波　苦しむ所無く
還作鯨鵬游　　還た鯨鵬の游を作さん

これは貞元十六年（八〇〇）、三十三歳に書かれた「海水」と題する詩の一部である。自己を小さな魚、小さな鳥になぞらえながら、広い海や鄧林は風や波がいつでも激しくて私にはふさわしくないから、ひとまず離れてゆこう、だが、私の鱗と翼が大きく成長して、風波を苦痛と感じなくなったとき、帰ってきて鯨や鵬のように動きまわるのだ、という希望を歌う。韓愈は貞元十二年（七九六）、汴州の宣武節度使董晋の幕僚、貞元十五年（七九九）、徐州の武寧節度使張建封の幕僚となったが、銭仲聯『韓昌黎詩繫年集釈』に引く清の方世挙の注によると、「按此篇蓋辞去徐州之時。海水鄧林、以比建封、魚鳥、自喩也。」と言う。韓愈が現実の卑小な自己の姿を「我鱗不盈寸、我羽不盈尺」と詠じたとき、地方の節度使の幕僚に甘んじる境涯への自嘲がこめられていたとしても、海水鄧林を張建封と結びつける必要はない。特に鄧林は、太陽と競走したためにのどが渇いて死んだ、夸父の投げ棄てた杖が変化して出現したといわれる林で（『列子』湯問）、ここには、太陽と競走する者＝高邁な理想を追求する者の美しいイメージが刻み込まれている。この美しい理想主義者のイメージが、現実の卑小な自己の未来像として誇り高き自己（呑舟鯨、垂天鵬）を詠じた韓愈の夢想と共鳴していることを知ればよいだろう。

ところで、鱗が一寸足らずの小さな魚が大魚に成長したとき、海水で自由に泳ぎまわることができるのだろうか。答は否である。貞元十七年（八〇一）の七月、韓愈は門人侯喜等と一緒に温水（洛水）に釣りに出かけたが、一日中粘って一寸程の小さな魚しか釣れなかった。韓愈は侯喜に言った（「贈侯喜」）。

君欲釣魚須遠去　　君魚を釣らんと欲せば須らく遠く去るべし
大魚豈肯居沮洳　　大魚　豈肯て沮洳（ぬまち）に居らんや

この詩について、清の王元啓は「公欲遠去、蓋有高隠之思、指塵世為沮洳耳。」（『韓昌黎詩繫年集釈』に引く）と指摘するが、遠い海水で泳ぐ自由（高隠）を理念形態として希求しながらも、泥濘の充満した「沮洳」＝塵世とこそ関わってゆく現実を韓愈（大魚）は選び取ったのではなかったろうか。

「海水」の詩で、自己の美しい未来像を夢想した理想主義者が、汚濁に満ちた俗世間の悪に立ち向かうとき、彼はどのような戦いを展開してゆくのであろうか。

二　悪への挑戦

〈攻撃性の噴出〉

貞元十九年（八〇三）、七月、韓愈は監察御史となった（三十六歳）。「利剣」と題する詩はこの年の作品である。

利剣光耿耿
佩之使我無邪心
故人念我寡徒侶
持用贈我比知音
我心如冰剣如雪
不能刺讒夫

利剣　光耿耿たり
之を佩ぶれば我をして邪心無からしむ
故人　我が徒侶寡きを念い
持して用って我に贈りて知音に比す
我が心は冰の如く　剣は雪の如し
讒夫を刺す能わず

使我心腐剣鋒折
決雲中断開青天
噫剣与我倶変化帰黄泉

我が心をして腐ち剣鋒をして折れしむ
雲を決きて中断し青天を開く
噫　剣と我と倶に変化して黄泉に帰せん

これは、鋭い剣を贈られながら、讒夫を攻撃できない無念さを詠じた詩である。「利剣光耿耿」と「不能刺讒夫」との間に横たわる深い断層が、抑圧された攻撃への黒い情念を物語っていよう。韓愈の攻撃性は「決雲」「開青天」という幻想の中でしか解放されず、結局「帰黄泉」という暗い詠嘆へと収斂されてゆくのである。「決雲」「開青天」の上昇のイメージから、「帰黄泉」の下降のイメージへと転化してゆく構造、及び、初発の「光耿耿」＝明の世界が、最終で「帰黄泉」＝暗の世界に逆転する構造は、「不能刺讒夫」という苦い現実認識の所産に他ならないだろう。「利剣」という詩題に象徴化された韓愈の攻撃性が、攻撃の不可能性を内実として仮構されたものであることに注意しなければならない。

ところで、「讒夫」とは一体誰だろう。王元啓は「恐指李実言之。」と述べているが、果たしてそうだろうか。「順宗実録」（巻一）によると、貞元十九年の春から夏にかけて、長安一帯の人民が干害で食糧難に苦しめられたとき、京兆尹となった李実は租税を厳しく取り立てるばかりで、俳優の成輔端が歌謡曲を作ってその政策を諷刺すると彼を打ち殺した、と見える。このとき、監察御史の韓愈が京兆府における租税の徴収凍結を求める上奏文（「御史台上論天旱人饑状」）を提出したことを考えるならば、「讒夫」を李実と見る説に全く根拠がない訳ではない。しかし、この年の春に韓愈は李実に「上李尚書書」（李実が京兆尹となったのは三月で、このときは検校工部尚書だった）という手紙を書き送り、その中で彼を「未だ赤心もて上に事え、国を憂うること家の如くにすること、閣下の如き者を見ず。」と讃えながら、その干害対策に賛同したのである。「赤心」「憂国」の賛辞が「就職を依頼する手紙の性質上、やむを得なかったことである。」（前野直彬『韓愈の生涯』）としても、干害対策への賛同を値引きしなければならない理由はない。韓愈は李実の手腕を評価したからこそ、適正な干害対策を期待したのであり、「讒夫」として諷刺する意図はなかったのではないだろうか。そのような李実が、「順宗実録」の中でダーティなイメージを刻印されたのは、それが公的な記録であるという理由によるものだろう。

同じく貞元十九年の作に、「題炭谷湫祠堂」（炭谷湫は、終南山のふもとの池で、龍が住むといわれた）という詩がある。

吁無吹毛刃　吁（ああ）吹毛の刃の
血此牛蹄殷　此の牛蹄に血ぬって殷（あか）くする無し

吹きかけた毛も切断する程の名剣で池に住む龍を斬り殺し、牛の足跡に水が溜ったようなこの池を真赤な血で染められないのが残念だ、と歌うこの詩について、王元啓は「貞元末、王韋之勢已成。此詩公為御史時、詆斥王韋之作。」と説明する。貞元の末年、王叔文、韋執誼等を中心として改革政治を実行するための派閥が形成された。このとき、韓愈は反主流派の立場にあったが、龍＝王叔文グループと見るのが王元啓の説である。それでは、王元啓は何故、「利剣」の詩で讒夫＝王叔文グループと看做さなかったのだろうか。「利剣」の詩で韓愈の攻撃性が攻撃の不可能性を内実としたように、ここでも韓愈の攻撃性は、攻撃の不可能性を媒介とする噴出を強

いられていることに注意しなければならない。[2] そして、このことは、韓愈が王叔文グループに対して反主流派の立場にあったことの反映と考えることによって、よく理解できるだろう。「利剣」の詩に「寡徒侶」と見えるのも、韓愈の孤立無援の境遇を暗示していよう。

〈指導者を倒せ〉

貞元十九年の冬、韓愈は突然、陽山令に左遷された。[3] この左遷を契機として、これまで抑圧されていた韓愈の攻撃性は、堰を切った奔流のように溢れ出してゆく。敗北体験が闘争心を逆に刺激したと言えようか。

咨余往射豈得已　　咨（ああ）　余往きて射ること豈已むを得んや
候女両眼張睢盱　　女（なんじ）が両眼の張って睢盱たるを候（うかが）う
梟驚堕梁蛇走竇　　梟は驚きて梁より堕ち蛇は竇（あな）に走る
一矢斬頸群雛枯　　一矢頸を斬りて群雛枯る

私はもう我慢できない。ふくろうを射殺しに行き、お前のぎょろっとした二つの目玉に狙いをつけて攻撃すると、ふくろうはびっくりしてはりから転落し、蛇は穴に逃げ込んだ。一本の矢でふくろうの首を撃ち取るとひなは全部死ぬ。これは凶暴なふくろう退治をテーマとした、「射訓狐」（貞元二十一年、三十八歳、陽山令のときの作）と題する詩の終りの四句だが、「射訓狐」という詩題と、「一矢斬頸」の最終句とがストレートに照応しており、攻撃の不可能性というモチーフは消失した。ここで韓愈は、悪の指導者――上部組織（訓狐）を倒せば、その仲間（蛇）や下部組織（群雛）は自然に崩壊する、という予見を語っている。[4]

〈警戒〉

韓愈は悪を攻撃すると同時に、悪に対する警戒も忘れない。太陽に圧倒されるみすぼらしい昼間の月を詠じた「昼月」[5]（貞元二十一年、陽山令のときの作）という詩は、次の二句で結ばれている。

嗟汝下民或敢侮　　嗟（ああ）　汝下民よ　敢えて侮ること或らんや
戲嘲盗視汝目瞽　　戲嘲盗視せば汝が目瞽せん

人民達よ、昼間の月を見くびるな。ふざけて馬鹿にし、こっそり盗み見すれば、お前の目はつぶれるだろう。

悪は時として自己を昼間の月のように偽装することがある。しかし、昼間の月も夜の世界では闇の中に燦然と輝く帝王となる。これは韓愈の悪に対するたゆみない警戒心の呼びかけと言ってよいだろう。

三　悪の諸相

次に、韓愈が攻撃の目標とした悪の諸相について、「雑詩四首」（貞元二十一年、陽山令のときの作）を中心に眺めてゆきたい。

〈党派性〉

韓愈は「順宗実録」（巻一）の中で、派閥の形成という視点から王叔文グループの政治運動を記録した。「雑詩四首」の其一と其四は政治上の利益集団——派閥を諷刺したものである。其一では、朝の蠅や夜の蚊は世界に充満して退治しきれないが（朝蠅不順駆、暮蚊不可拍、蠅蚊満八区、可尽与相格）、九月になって涼しい風が吹けば跡形もなく一掃されるだろう（涼風九月到、掃不見蹤跡）、と歌う。方世挙によると、「朝蠅」「暮蚊」は王叔文グループを指すと言う。[6] 其四では、

雀鳴朝営食　雀は鳴きて朝に食を営み
鳩鳴暮覓群　鳩は鳴きて暮に群を覓む
独有知時鶴　独り時を知る鶴有りて
雖鳴不縁身　鳴くと雖も身に縁らず
喑蟬終不鳴　喑蟬は終に鳴かず
有抱不列陳　抱くこと有るも列陳せず
蛙黽鳴無謂　蛙黽は鳴くこと謂れ無く
閣閣祇乱人　閣閣として祇だ人を乱る

この詩の寓意について、王元啓によると「雀鳩」は「一時欲速僥倖之徒」（王叔文グループ）、「喑蟬」（おしの蟬）は、王叔文、韋執誼の独断専行に反発した三人の宰相——杜佑、高郢、鄭珣瑜、「蛙黽」（雨蛙）は「当時

内外怨毒遠近疑懼之人」と言う。[7]「順宗実録」に基づいて導いた正当な見方だと思うが、雀、鳩、鶴、おしの蟬、雨蛙の入り乱れた絵模様は、派閥内部の複雑な関係性を暗示したものとも言えるだろう。党派性に集約化されたどす黒い政治機構の縮図がここにある。

＜内ゲバ＞

其二は次のように歌われている。

鵲鳴声楂楂　　鵲鳴きて声楂楂たり
烏噪声擭擭　　烏噪ぎて声擭擭たり
争鬪庭宇間　　庭宇の間に争鬪し
持身博弾射　　身を持して弾射に博う
黄鵠能忍飢　　黄鵠は能く飢えを忍び
両翅久不擘　　両翅　久しく擘かず
蒼蒼雲海路　　蒼蒼たり雲海の路
歳晩将無獲　　歳晩　将に獲無からんとす

かささぎとからすが鳴き騒ぎながら、体で相手を撃ち落とそうと屋敷の中で争っている。飢えをこらえ羽をすぼめて飛ぶ機会を狙っていた大鳥は、年の暮れに青々とした雲海の道を捕まることもなく飛んでゆく。ここに描かれたかささぎとからすの争いは、権力者同士の内部抗争（方世挙によると王叔文と韋執誼の対立。この二人は政策上の対立から仲間割れした）を諷刺したものであり、雲海の道を飛び去る大鳥（どす黒い政治の歯車から脱出する者。方世挙によると、病気を理由に政界を引退した宰相賈耽を指す）は、権力者間の内ゲバがその代償としてもたらした大きな損失を暗示するものに他ならないだろう。[8]

＜人材起用のミス＞

其三を見てみよう。

截橑為櫨櫨　　橑（たるき）を截りて櫨櫨（ますがた）と為し

斷楹以為椽　楹（はしら）を斷りて以て椽（たるき）と為す
束蒿以代之　蒿を束ねて以て之に代う
小大不相権　小大　相権らず
雖無風雨災　風雨の災無しと雖も
得不覆且顛　覆り且つ顛れざることを得んや
解轡棄騏驥　轡を解きて騏驥を棄て
蹇驢鞭使前　蹇驢　鞭ちて前ましむ
崑崙高万里　崑崙　高きこと万里
歲尽道苦遭　歲尽きて道苦だ遭む
停車臥輪下　車を停めて輪下に臥し
絶意於神仙　意を神仙に絶つ

たるきを切ってますがたを作り、柱を切ってたるきを作ること、及びよもぎを束ねてたるきや柱の代用にすることは、人材の配置がアンバランスな状態にあることのたとえであろう。(9) 神仙の住む高くて遠い崑崙山に登るのに、騏驥（名馬。才能のある優秀な人間のたとえ）を棄てて蹇驢（びっこのろば。才能のない愚昧な人間のたとえ）に鞭打ちながら進んだのでは、一年かかっても辿り着けず、あきらめるより他ないだろうと詠じるのも、政府の人材起用のミスを諷刺したものと考えることができる。ここには、自己を崑崙山に登るのに必要な名馬になぞらえる韓愈の高いプライドが滲み出ていると同時に、低劣な「蹇驢」が政界をのし歩き、プライドの高い「騏驥」が敗北を強いられる、不条理な現実に対する激しい憤りが渦巻いている。

王叔文グループによる改革政治は半年余りで終止符を打たれ、永貞元年（八〇五）の秋、韓愈は陽山令から江陵府法曹参軍事に転任する。左遷という極措を取り除かれた訳だが、しかし、このときから、「崑崙」＝高邁な理想に向かって突き進む情熱の空転に憤った理想主義者の攻撃性は、大きく変容してゆくのである。

四　攻撃性の変容

〈理想主義の挫折〉

太華峰頭玉井蓮　　太華（華山）峰頭　玉井の蓮
開花十丈藕如船　　花を開くこと十丈にして藕（蓮の花）船の如し
冷比雪霜甘比蜜　　冷やかなることは雪霜に比し甘きことは蜜に比す
一片入口沈痾痊　　一片口に入れば沈痾（長わずらい）痊ゆ
我欲求之不憚遠　　我之を求めんと欲して遠きを憚らず
青壁無路難攀緣　　青壁路無くして攀緣し難し
安得長梯上摘実　　安んぞ得ん　長梯もて上りて実を摘み
下種七沢根株連　　下りて七沢に種えて根株連ならんことを

これは貞元十九年、陽山令のときに書かれた「古意」と題する詩である。華山の山頂の美しい池に咲く大きな蓮の花を求めてはるばると出かけたが、切り立った青い山壁をよじ登ってゆくことができない。どうにかして長いはしごを手に入れ、登って蓮の実を摘み、七つの沼に植えて繁殖させたいものだ。ここには「玉井蓮」＝高邁な理想を希求する情熱と、「長梯」（理想を実現する手段）がないために理想を達成できない苦悩とが詠じられている。[10] このとき韓愈が突き当たったのは、理想主義の挫折という巨大な壁に他ならない。この壁の下に横たわるのは「長梯」のない負の現実である。そして、韓愈の視線が壁の上の理想から壁の下の負の現実へと移行してゆくとき、マイナス価値の認識という新たな地平に足を踏み入れることになる。

〈マイナス価値の認識〉

永貞元年、江陵府法曹参軍事になった年（三十八歳）、韓愈は「赴江陵途中寄贈王二十補闕李十一拾遺李二十六員外翰林三学士」の中で言った。

自従歯牙欠　　歯牙の欠けてより

始慕舌為柔　始めて舌の柔を為すを慕う

歯が抜け落ちてはじめて柔らかい舌の有難さが分かった。[11] 韓愈はかつて、自分の歯が一本一本抜けてゆくのを見て、「語訛黙固好、嚼廃軟還美」（「落歯」、貞元十九年）――うまく話せないならば沈黙の美徳を守ればよい、噛めなくなると柔らかい食物がおいしい、と居直った。そこには「落歯」＝負の現実そのものに価値を見出そうとする姿勢が感じられるが、[12] 固い歯から柔らかい舌へと韓愈の視線が転じたとき、マイナス価値の認識という思念の結晶をもたらしたのである。

「題木居士二首」も同じ年に書かれた詩だが、其二は次のように歌われている。

為神詎比溝中断　神と為ることは詎ぞ溝中の断に比せん
遇賞還同爨下余　賞に遇うことは還た爨下の余に同じ
朽蠹不勝刀鋸力　朽蠹　刀鋸の力に勝えず
匠人雖巧欲何如　匠人巧なりと雖も何如せんと欲す

木居士は木彫りの神像、ここは、老木が自然に彫刻されてそのようになったもの。この詩は「木像を神として幸福を祈る人たちに対する諷刺詩である。[13]」（清水茂『韓愈』、岩波書店）と言われるが、其二を読むと必ずしもそうとは思えない。溝中断は、どぶに捨てられた木片で、価値のないもののたとえ。『荘子』天地篇に見える語。[14] 爨下余は、かまどの下のたきぎの燃え残り。後漢の蔡邕が桐の燃え残りで「焦尾琴」と呼ばれる良質の琴を作った故事に基づく。[15] 老木が神として崇拝され良質の琴のように愛されるのは、腐って虫が沸き、腕利きの大工の手にさえ負えなかったために他ならない。ここで韓愈は、「朽蠹」というマイナス面が「為神」という価値を生み出したことを強調していないだろうか。

「短灯檠歌」（短い燭台を讃える歌）は元和元年（八〇六）、三十九歳、権知国子博士（権知は、職務見習い）として長安に帰ったときの作だが、そこでも韓愈は、

長檠八尺空自長　長檠八尺　空しく自ら長し
短檠二尺便且光　短檠二尺　便にして且つ光あり

と、長いだけで役に立たない「長槃」と比較しながら、「二尺」という短さ故に「便利で明るい」「短槃」の美質――マイナス価値を讃えている。

元和三年(八〇八)、韓愈は四十一歳で正式に国子博士に就任するが、元和五年(八一〇)、四十三歳で河南令に転任。翌元和六年(八一一)、四十四歳の正月、彼は「送窮文」を書く。[16]

送窮は、正月の下旬に貧乏神を追い出す年中行事。韓愈は柳の車、草の船に食糧を積み、五人の貧乏神(智窮・学窮・文窮・命窮・交窮)を追放しようとする。ところが、彼等は一斉に反発して言う。

人の一世に生くる、其の久しきこと幾何ぞ。吾子が名を立てて、百世磨(ほろ)びざらしめん。

私達が貴方の名を永遠に残るようにしてあげよう。貧乏神にこう言われて、主人(韓愈)は彼等を上座に招いて座らせるのである。韓愈の「送窮文」は漢の揚雄の「逐貧賦」に基づいており、[17]そこでも「貧逐不去、与我遊息」と見える通り、貧乏神は出て行かない。しかし、「送窮文」の場合、「焼車与船、延之上座」のように、「窮」＝貧乏神を「主人」の位置に据えたことを見逃してはならない。これは韓愈が、不滅の名をもたらすものとして、「窮」というマイナスの因子を高く評価したことを物語るものと言えるだろう。

柔らかいために破壊されずに残る舌、腐って虫が沸いたために神として崇拝される老木、短いために役に立つ燭台、人に不滅の名をもたらす五人の貧乏神――これらマイナス価値の認識は、陽山令左遷という敗北体験を契機としなければ生み出されなかったろう。[18]韓愈は陽山令左遷を契機として、その攻撃性を噴出させたと既に書いたが、それは、韓愈における攻撃性の噴出が左遷という現実の危機意識をバネとして仮構されたものであるということだ。そして、彼は左遷という桎梏が取り除かれたとき、即ち、現実における危機意識が解消したとき、敗北体験を表現の領域に内在化することによって自ら危機意識を仮構したのである。韓愈の詩は「往往以醜為美」[19]と言われるが、「以醜為美」に象徴化されるマイナス価値の認識は、そのような危機意識の仮構という方法によって必然化された試みだと言えよう。ここに左遷という敗北体験の血肉化を見ることができる。

〈敗北からの蘇生〉

敗北体験の内在化と書いたが、それは敗北のもたらす悲劇性に沈淪するだけの軟弱な精神からは生まれない。

元和六年の秋、韓愈は尚書職方員外部に転任するが、このときに「双鳥詩」と題する詩を書いた。二羽の鳥が世界に君臨するようすと、捕えられて別々の場所に閉じ込められるようすとを描いたこの詩の最後で、彼は二羽の鳥が逞しく蘇生する未来像を詠出している。

還当三千秋　　還た三千秋に当たりて
更起鳴相酬　　更に起ちて鳴きて相酬いん

二羽の鳥が何を指すかについては諸説あるが、[20]「感二鳥賦」に表われた栄光の二羽の鳥が韓愈の憧憬の対象であったように、それを韓愈自身の投影と見ることはできないだろうか。即ち、二羽の鳥の君臨・分裂・蘇生は、韓愈における栄光・敗北・敗北からの蘇生を象徴化したものと考えられる。

「游城南十六首」（元和十一年、四十九歳）の中の「楸樹二首、其一」についても同様のことが言えるだろう。

幾歳生成為大樹　　幾歳か生成して大樹と為る
一朝纏繞困長藤　　一朝纏繞して長藤に困しめらる
誰人与脱青羅帔　　誰が人か与に青羅の帔を脱して
看吐高花万万層　　高花万万層を吐くことを看ん

成長して大木となったひさぎ、それが長い藤蔓に巻き付かれて苦しむようす、そして、青いうすぎぬの打ち掛け（藤にたとえる）からの脱出の願いは、それぞれ韓愈自身の栄光・敗北・敗北からの蘇生を象徴化したものと見てよいだろう。

この二つの詩で韓愈が敗北からの蘇生を詠じたのは偶然ではない。敗北からの蘇生を願う強靱なエネルギーこそが、敗北体験を内在化させる原動力として働いたのだ。

韓愈がマイナス価値の認識という視座を獲得したとき、ストレートな攻撃性は変容を受けたと言わざるを得ない。これまで外部に対して向けた攻撃の刃は鈍化され、韓愈の眼は自己の内部を凝視する。

五　敗者の視点

元和十四年(八一九)の正月、刑部侍郎の任にあった韓愈は、「論仏骨表」で仏教排撃の主張を展開したため、憲宗の怒りを買って潮州刺史に左遷される(五十二歳)。この二度目の左遷は韓愈の詩から攻撃性を殺ぎ落とし、敗者の視点を尖鋭化させてゆく引き金となった。韓愈が潮州で書いた「琴操十首」(琴曲の意。蔡邕の「琴操」に倣った作)を貫くものは、この敗者の視点である。

〈不戦の立場〉

「琴操十首」の第一首「将帰操」を見ると、

狄之水兮　　狄の水
其色幽幽　　其の色幽幽たり
我将済兮　　我将に済(わた)らんとして
不得其由　　其の由を得ず
涉其浅兮　　其の浅きところを涉らんとすれば
石齧我足　　石我が足を齧む
乗其深兮　　其の深きところに乗れば
龍入我舟　　龍我が舟に入る
我済而悔兮　　我済りて悔あらば
将安帰尤　　将(は)た安にか尤を帰せん
帰兮帰兮　　帰らんかな帰らんかな
無与石鬬兮　　石と鬬うこと無かれ
無応龍求　　龍の求めに応ずること無かれ

この詩は「孔子之趙聞殺鳴犢作。」という序文を持つ。孔子が趙簡子の招きで趙に行こうとして狄水を渡った

とき、趙簡子が賢明な大夫竇鳴犢を殺したことを聞いて行くのを止めた故事に基づきながら、孔子の取った態度を讃えたのである。ここでは韓愈の攻撃性は影を潜めて、不戦の立場へと転じている。

第六首「岐山操」は「周公為太王作。」という序文を持つ。周の先祖太王（古公亶父）が豳の領土を狄人に侵略されたとき、戦いを避けて岐山の麓に移住すると、人民は皆付いて行った故事を踏まえて、

民為我戦　民我が為に戦わんとす
誰使死傷　誰か死傷せしめん

と、戦争否定の立場を貫いた太王の姿を描いている。

韓愈がかつて陽山令に左遷されたとき、彼は現実の危機意識をバネとして攻撃性を仮構した。それは政治抗争の渦中で曖昧な理由によって左遷されたことに対する怒りから発するものだったろう。それに対して、これらの詩に、潮州刺史左遷の敗北体験が不戦の立場への共鳴としてほぼそのまま投影されていることは、現実の危機意識が攻撃性の仮構を許さぬ程深い傷痕を韓愈の心に刻んだことを意味していよう。

〈敗北の自己意識〉

第五首「拘幽操」は、周の文王が讒言され殷の紂王によって羑里の牢獄に監禁された事件をモチーフとして詠じる詩である（文王羑里作）。

目窈窈兮　目窈窈として
其凝其盲　其れ凝り其れ盲す
耳肅肅兮　耳肅肅として
聽不聞声　聽けども声を聞かず
朝不日出兮　朝に日出でず
夜不見月与星　夜に月と星とを見ず
有知無知兮　知ること有りや知ること無しや
為死為生　死と為さんか生と為さんか

嗚呼臣罪当誅兮　　嗚呼　臣（文王）が罪誅に当たれり
天王聖明　　天王（紂王）聖明なり

蔡邕の「琴操」が、「無辜桎梏、誰所宣兮」という歌を引いて文王の無実を強調したのを反転させて、韓愈が敢えて文王の有罪性を強調するのは何故だろうか。彼は潮州刺史に左遷されることによって、羑里の牢獄に監禁された文王と敗北体験を共有したと言えるだろう。そして、牢獄という閉じられた世界で自己処罰の欲求に駆られる文王の、極限化された負のイメージの中に敗北の自己意識を融解させることによって、敗者としてのアイデンティティを刻印したのである。

第七首「履霜操」[21]、第八首「雉朝飛操」[22]、第九首「別鵠操」[23]はそれぞれ、無実の罪で継母に追放された飢えた孤児の悲しみ、七十歳の独身男性の孤独の悲しみ、結婚しても子供が出来ないために離縁される女性の悲しみを詠じる詩で、いずれも社会の片隅でひっそり生きる日陰の存在に対する強い共鳴の視線が貼り付いている。自己自身が敗北者の烙印を押されることによって、蔡邕の「琴操」は韓愈の心の琴線に触れ、それを母胎として憂愁に溢れた敗北の美学を構築したのである。[24]

〈飛べない鳥〉

元和十四年、十月、韓愈は潮州刺史から袁州刺史に転任。元和十五年（八二〇）、九月には国子祭酒として中央政界に返り咲いた。翌長慶元年（八二一）、五十四歳のときの作品「南山有高樹行、贈李宗閔」は、南山に住み着いた美しい鳥が弾き玉で撃たれて転落するようすを詠じている。

不知挾丸子　　知らず　丸を挾む子
心黙有所規　　心に黙して規る所有り
弾汝枝葉間　　汝を枝葉の間に弾つ
汝翅不覚摧　　汝が翅　覚えずして摧く
……　　……
汝落蒿艾間　　汝蒿艾の間に落つ

幾時復能飛　　幾時か復た能く飛ばん
哀哀故山友　　哀哀たり故山の友
中夜思汝悲　　中夜に汝を思いて悲しむ
路遠翅翎短　　路遠くして翅翎短し
不得持汝帰　　汝を持して帰るを得ず

長慶元年、三月に科挙の試験が行われたとき、西川節度使段文昌と翰林学士李紳が、試験官の右補闕楊汝士と礼部侍郎銭徽に贔屓の受験生を合格させて欲しいと頼んだ。ところが、彼等の依頼した受験生は落第し、宰相裴度の子裴譔、中書舎人李宗閔の婿蘇巣、楊汝士の弟楊殷士等が合格した。これに腹を立てた段文昌、李紳及び翰林学士李徳裕、元稹が今年の試験は不公平であると天子（穆宗）に訴えたため、試験はやり直しとなり、四月には銭徽が江州刺史、李宗閔が剣州刺史、楊汝士が開江令にそれぞれ左遷された（『資治通鑑』巻二四一）。任子派（李徳裕）と挙子派（李宗閔）の対立が絡んだこの事件を背景に韓愈の詩は書かれたと言われ、「鳳凰」「黄鵠」（引用省略）「挾丸子」の寓意について、「鳳凰謂裴度、挾丸子謂李徳裕、李紳、元稹也。」（韓醇）「鳳皇謂裴度、挾丸子謂李徳裕、黄鵠謂元稹、李紳也。」（陳沆『詩比興箋』）等の説がある。そのように具体的な人名を当てはめて考えることよりも、韓愈が攻撃を加える立場ではなく、攻撃される敗者の視点に立脚して、救出不可能の飛べない鳥の姿を詠出した理由を考えてみなければならない。この詩が国子祭酒として政界に復帰したときの作品でありながら、敗者の視点に立脚して転落者の悲劇を描き出したのは、潮州刺史左遷の敗北体験が韓愈の胸底で残影となって揺曳していることを物語るのだ。

譬如籠中鶴　　譬えば籠中の鶴の
六翮無所揺　　六翮　揺（うご）く所無きが如し

これも又、飛べない籠の鳥を詠じたものだが（「与張十八同効阮步兵一日復一夕」、長慶四年、五十七歳）、かつて天子の恩寵に満たされた栄光の空間のシンボルだった籠の中（「感二鳥賦」）は、自由を奪われた敗者の空間に変質したと言えよう。

〈悪の救出〉

陽山令左遷の敗北体験の血肉化により韓愈の攻撃性は変容したと既に書いたが、そのことは韓愈の悪に対するアプローチの仕方にも反映されている。

「病鴟」（元和十一年、四十九歳）はどぶにはまった鳶を描いた詩である。韓愈はどぶにはまり子供達にいじめられる鳶を救い出す（丐汝将死命、浴以清水池）。ところが、鳶は気力を回復すると礼も述べずに飛び去って行く（今晨忽径去、曽不報我知）。この恩知らずな鳶を彼は憎まず、どぶの中にはまった屈辱を教訓とせよと忠告するのである（勿諱泥坑辱、泥坑乃良規）。どぶにはまった鳶は、打ちのめされた悪の象徴と見てよい。悪の救出と、それに対する背信は信義を裏切る人間を諷刺したものだろう。又、背信行為に対して忠告まで与える韓愈の寛容さは、憎むにさえ値しないことを示す逆説的な悪の断罪と言えようか。

初めて南方料理を食べた経験を詠じた「初南食貽元十八協律」（元和十四年、潮州刺史のときの作）にも、同様のことが当てはまるだろう。

開籠聴其去　籠を開きて其（蛇）の去るを聴せば
鬱屈尚不平　鬱屈として尚不平なり
売爾非我罪　爾を売るは我が罪に非ず
不屠豈非情　屠らざるは豈情に非ずや

籠から逃がしてやった蛇が逆恨みするのを、お前を殺さないのは思い遣りというものだとたしなめる。蛇を悪のシンボルと解するならば、悪の救出、救出に対する背信、背信に対する寛容さの構図は、「病鴟」のそれと等しい。このような悪に対するアプローチの仕方こそ、韓愈における攻撃性の変容の結実を示すものに他ならない。

〈武器なき戦い〉

韓愈が「琴操」の中で不戦の立場に対する共鳴を示したことは既に述べた。戦争否定も一つの戦いだと言えようが、長慶元年、国子祭酒として政界に復帰したとき、彼は「猛虎行」の中で新しい戦いの形を描いて見せた。

獰猛な虎にはそれぞれ仲間がいて、集団でのし歩き黄熊や赤豹を捕まえて食べる。仲間がいなくなると、猛虎は一人ぼっちだ。狐と烏鵲（かささぎ）が洞窟の入口で騒ぎ立てるので、出て行って追い払った。その隙に猴（さる）が住居に侵入して、帰る場所のなくなった虎は悲しそうに泣く。虎に食べられた豹と熊の仲間が虎を退治すると、虎はすっかり恥じ入る（猛虎雖云悪、亦各有匹儕。群行深谷間、百獣望風低。身食黄熊父、子食赤豹麑。……匹儕四散走、猛虎還孤棲。狐鳴門両旁、烏鵲従噪之。出逐猴入居、虎不知所帰。誰云猛虎悪、中路正悲啼。豹来銜其尾、熊来攫其頤。猛虎死不辞、但慙前所為）。

イソップ物語の寓話にも似たこの詩で、韓愈は何を言いたいのだろうか。退治される虎は悪の末路の象徴と見てよいが、ここには悪を攻撃する武器——剣、矢、弾き玉等が登場しない。狐、かささぎ、さるという小動物達の共同の頭脳プレーによって虎は追放され、豹と熊が止めを刺す。これらの動物達の武器なき戦いには、頭脳と肉体の融合を武器として戦うとき、人は巨大なパワーを発揮することができる、という韓愈のメッセージがこめられているのではないだろうか。とりわけ、虎の反省というユニークなモチーフは、敗者の視点によって深化された韓愈の豊かな人間認識を表わしていよう。[25]

〈敗北のエネルギー〉

長慶三年（八二三）、五十六歳、死の一年前に書かれた「枯樹」を見てみよう。

老樹無枝葉　老樹　枝葉無く
風霜不復侵　風霜　復た侵さず
腹穿人可過　腹穿ちて人過ぐべく
皮剝蟻還尋　皮剝けて蟻還た尋ぬ
寄託惟朝菌　寄託　惟だ朝菌のみ
依投絶暮禽　依投　暮禽を絶つ
猶堪持改火　猶持して火を改むるに堪えたり
未肯但空心　未だ肯て但だ空心ならず

この詩の最後で、枯れ果てた老木も季節毎の火を交代する役に立つから、空っぽになった芯も全く無駄にはならない、と詠じるのは、北周の庾信が「火入空心、膏流断節」（「枯樹賦」）と詠じた「空心」のマイナスイメージを反転させて、「空心」の持つマイナス価値を強調したのだと言えよう。このとき老木を燃え立たせた赤い炎は、韓愈の胸底で発火した敗北のエネルギーの燃焼を象徴するものに他ならない。

こうして、韓愈における攻撃のエネルギーは、敗北のエネルギーに転換したのである。

注

（1）ここで寓言詩と呼ぶのは、寓意を含む詩という程の意味であり、諷諭詩も含めて考える。これは陳蒲清『中国古代寓言史』（湖南教育出版社、一九八三）、馬徳懋「白居易寓言詩初探」（『全国唐詩討論会論文選』陝西人民出版社、一九八四）等で、白居易の諷諭詩を「寓言詩」として扱っているのに倣った。対象を寓言詩に限定したのは、清の陳沆『詩比興箋』を除けば、韓愈の寓言詩について論じたものが殆どないことと、韓愈の攻撃性の変容の過程がとりわけ寓言詩によく反映されていること、とによる。韓愈の詩の制作年代は、銭仲聯『韓昌黎詩繫年集釈』に従った。

（2）韓愈の攻撃性が攻撃の不可能性を媒介として噴出する詩は他に、「惜哉不得往、豈謂吾無能」と詠じる「秋懐詩十一首、其四」（元和四年、三十九歳）がある。

（3）陽山令左遷については拙稿「韓柳友情論」（『文芸言語研究』文芸篇九）でも触れたが、王叔文グループの策謀と見るのが定説となりつつあるように思われる。閻琦『韓詩論稿』（陝西人民出版社、一九八四）は、王叔文グループの革新政治の積極的意義を肯定しながらも、韓愈を陽山令に左遷したのは誤りだった、と述べている。

（4）韓愈のこの予見は現実のものとなり、貞元二十一年（八〇五）、八月、順宗が退位して憲宗が即位すると同時に、王叔文グループは政界から追放される。貞元が永貞と改元され、韓愈は江陵府法曹参軍事に転任するが、このときに書いた「龍移」は「射訓狐」の姉妹篇と呼んでよい作品で、蛟龍が移動したために泉の水がなくなり、魚鼈が干からびて死んだ、と詠じている。蛟龍の移動は政権の交代、魚鼈の枯死は下部組織の崩壊を暗示するものだろう。

（5）この詩題が『涅槃経』に基づくものであることは、「韓柳友情論」で述べた。

（6）「蠅蚊自古以喩小人、此則指（王）伾、（王叔）文輩也。内而牛昭容、李忠言、外而韋執誼、二韓（韓泰・韓曄）、

劉（禹錫）、柳（宗元）、陸質、呂温、李景儉、陳諫、房啓、淩準、程异等、莫非其党。」（『韓昌黎詩繫年集釈』に引く）

（7）陳沆『詩比興箋』には、「此喩四等人也。営食覓群者、但知身謀之小人。有抱不陳者、畏禍自全之庸人。無謂祇乱人者、弁言乱政之小人。惟鳴不緣身則君子。」と見える。

（8）夜明けの空に並んだ太白星と残月の光も朝が来れば奪われるのだと歌う「東方半明」（貞元二十一年、陽山令のときの作）も又、権力者同士の内部抗争が権力自体の崩壊をもたらす愚かしい結末を予言した詩と考えることができる。「月謂叔文、太白謂執誼。」（『詩比興箋』）

（9）『韓昌黎詩繫年集釈』に引く宋の孫汝聴の説に、「橑大而榱櫨小、椽大而椽小、今裁橑為榱櫨、斲楹為椽、失其宜矣。是猶君子而居下位也。楹橑既為榱櫨為椽、乃束蒿以代橑楹焉、是猶小人而居君子之位也。」と見える。

（10）唐の李肇『国史補』（巻之中）に、韓愈が華山の山頂に登ったとき、下山できなくなり「発狂慟哭」した、という話が見える。荒唐無稽と退けることもできようが、理想が現実化したとき人はどのようにうろたえるかを描いたイロニカルな寓話として読めば、なかなか面白い。「韓愈好奇、与客登華山絶峰、度不可返。乃作遺書、発狂慟哭。華陰令百計取之、乃下。」（韓愈登華山）

（11）老子が歯の抜けた常摐の口を見て、舌は柔らかいために残り歯は固いために無くなった、という教訓を学んだ故事に基づく。『説苑』巻十、敬慎に載せる話で、『淮南子』巻十、繆称訓にも「老子学商容、見舌而知守柔矣。」とほぼ同様の内容が記されている。

（12）白居易にも「歯落辞」（開成二年、六十六歳）と題する詩があるが、そこでは歯の抜けた現実に対する嗟嘆は、「所宜委百骸而順万化」という諦観へと昇華されてゆき、韓愈と極めて対照的である。

（13）陶道恕「一針見血　入木三分——韓愈詩《題木居士二首》其一欣賞」（『閲読和欣賞』古典文学部分（九）、広播出版社、一九八四）も、「以打破偶像崇拝為主題的七絶組詩」と言う。

（14）「百年之木、破為犧尊、青黄而文之、其断在溝中。比犧尊於溝中之断、則美悪有間矣、其於失性一也。」ここで、「犧尊」（美）と比較される「溝中断」（悪）は、「失性」という視点を媒介とする美悪の差異の相対化により、「犧尊」と等価値のものにレベルアップされたことになる。しかし、韓愈はそこまで言っていない。

（15）「呉人有焼桐以爨者。邕聞火烈之声、知其良木、因請而裁為琴。果有美者、而其尾猶焦、故時人名曰焦尾琴焉。」（『後漢書』蔡邕列伝）

(16) 曾敏之「韓愈其人」(『文史品味録』、花城出版社、一九八三) は、「韓愈写過一篇《送窮文》、但他并不窮。」と言い、韓愈が経済的に恵まれていたことを述べている。送窮が形式化した年中行事であることを考えれば、こういう詮索は無用と言えよう。又、たとえ韓愈が経済的に恵まれていたとしても、そのような人物が何故表現の領域で「窮」にこだわるのか、という問題こそが追求されなければならない。

(17) 清の林紓は「《逐貧賦》、揚子与貧、但一問一答。《送窮文》則再問再答、文気似厚、而所以描写窮之真相、亦較揚文為刻深、真神技也。」(『韓柳文研究法・韓文研究法』) と、両者を比較する。

(18) 太田次男氏が「韓愈についての一考察――特にその官人生活を中心として――」(『斯道文庫論集』第一輯) の中で、「韓愈文学の原型は、これ (連続三度に及ぶ宰相への上書――引用者注) が書かれた二十八歳の頃までに、既に出来上っていたとみてもよいであろう。」と述べたのに対して、林田慎之助氏は「韓愈における発憤著書の説」(『中国中世文学評論史』) の中で、「韓愈文学の原型が確立するのはむしろこの二十八歳の時を出発として、自分の不運が荷わねばならなかった悲劇性の意味を告発しつづける過程であって、そのためにはこれからほぼ十年の歳月を必要としたと考えられる。」と反論するが、陽山令左遷を契機として韓愈の文学が前進したという指摘は、どちらにもない。

(19) 「昌黎詩往往以醜為美。然此但宜施之古体、若用之近体則不受矣。是以言各有当也。」(清、劉熙載『芸概』巻一、文概) 但し、ここは韓愈の詩法について述べたものである。許可「論韓愈的詩」(『中国古典文学論叢』第一輯、人民文学出版社、一九八四) は、「以醜為美」を韓詩の怪奇性と結び付けて引用している。

(20) 韓愈・孟郊説 (宋、葛立方『韻語陽秋』巻六。朱熹『昌黎先生集考異』巻二。清、姚範『援鶉堂筆記』巻四十。翁方綱『石洲詩話』巻二。陳沆『詩比興箋』巻四)。釈迦・老子説 (宋、柳開「韓文公双鳥詩解」)。李白・杜甫説 (宋、張表臣『珊瑚鈎詩話』巻一)。なお、羅聯添『韓愈』(古風叢書六、河洛図書出版社) は韓詩の想像力について述べた部分でこの詩を取り上げ、次のように論じている。「案韓愈朋友裴度嘗称韓愈『以文為戲』(与李翺書)、這大概也是遊戯之作、故措辞、想像極尽奇詭之能事。」

(21) 「尹吉甫子伯奇無罪、為後母譖而見逐、自傷作。」(序)

(22) 「牧犢子七十無妻、見雉双飛、感之而作。」(序)

(23) 「商陵穆子娶妻五年無子、父母欲其改娶。其妻聞之、中夜悲嘯。穆子感之而作。」(序)

(24) 潮州刺史のときに書いた作品に「鱷魚文」がある。潮州のわにに向かって、南海に移らなければ殺してやろうと告

げる好戦的な文章で、攻撃性の狂い咲きと言ったら言い過ぎになるかも知れないが、それでさえ、わにの移動命令に「三日」「五日」「七日」という段階的な猶予期限を設けたところに、攻撃性の鈍化を読み取ることはできよう。

(25)　「猛虎行」について、方世挙は「大抵為残忍暴虐不恤将士諸節度作。」と見る。「猛虎行」は楽府題で、『楽府詩集』(宋、郭茂倩)巻三十一には魏の文帝、晋の陸機、劉宋の謝惠連、唐の儲光羲、李白、韓愈、張籍、李賀、僧斉己の作品が収められているが、猛虎が退治されるのを詠じた詩は韓愈の他にない。